

# わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第145号

イザヤ 65:1

平成19年10月26日

私には大きな悲しみがあり、わたしの心には絶えず痛みがあります。もしできることなら、わたしの同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから引き離されて、のろわれた者となることさえ願いたいのです。彼らはイスラエル人です。子とされることも、栄光も契約も、律法を与えられることも、礼拝も、約束も彼らのものです。先祖たちも彼らのものです。またキリストも、人としては彼らから出られたのです。このキリストは万物の上であり、とこしえにほめたたえられる神です。アーメン。しかし、神のみことばが無効になったわけではありません。なぜなら、イスラエルから出る者がみな、イスラエルなのではなく、アブラハムから出たといつて、すべてが子どもなのではなく、「イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる。」のだからです。すなわち、肉の子どもがそのまま神の子どもではなく、約束の子どもが子孫とみなされるのです。約束のみことばはこうです。「私は来年の今ごろ来ます。そして、サラは男の子を産みます。」このことだけでなく、私たちの先祖イサクひとりによってみごもったリベカのこともあります。その子どもたちは、まだ生まれてもおらず、善も悪も行なわないうちに、神の選びの計画の確かさが、行いにはよらず、召してくださる方によるようにと、「兄は弟に仕える。」と彼女に告げられたのです。「わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ。」と書いてあるとおりです。それでは、どういうことになりますか。神に不正があるのですか。絶対にそんなことはありません。神はモーセに、「私は自分のあわれむ者をあわれみ、自分のいつくしむ者をいつくしむ。」と言われました。したがって、事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。聖書はパロに、「私があなたを立てたのは、あなたにおいてわたしの力を示し、わたしの名を全世界に告げ知らせるためである。」と言っています。こういうわけで、神は、人をみこころのままにあわれみ、またみこころのままにかたくなにされるのです。

## ローマ人9：2-18

ローマ人への手紙の9章には、神の主権が実に明確に語られています。なぜ私はキリストを信じ、あなたは信じないのか、この疑問の答えは、神の絶対的な主権に見出すことができるのです。ここでパウロが自分の同胞が救われるためなら、自らを犠牲にしてもよいとまで語っている背景にあるのは、人間がすべて神から引き離され、滅びに至るものとなったという聖書の語る真理、人間の滅びというだれも避けて通ることのできない事実です。それは、最初の人アダムが、不従順のゆえに神との正しい関係を失ったことによって、全人類が、人間史の最初の時点ですでに「失われたもの」、靈的に死んだ者になったという人間史の大前提です。アダムが犯した罪のゆえに、それ以降の人類はすべて神の前にすべての権利を失い、滅びに至るものとなったという認識なくして、冒頭に引用した聖書箇所を理解することはできないのです。全聖書はこの大前提に立って、書かれています。

したがって、もし一被造物にしか過ぎない人間が創造者である神との最初の関係に戻されるとしたら、神の一方的な憐れみ以外にないことは明らかです。『造られたもの』と『造られた方』の絶対的な違いを認めるとき、聖書の主張が抵抗なく、求める者の心に入ってきます。「失われたもの」の状態から救われたい、神との正しい関係に戻りたいという願いは、神の大家族の一員として神に似せて造られた人間には生まれ備わっているからです。このように、神への反逆という罪のゆえ、究極的な滅びが宣告されただけでなく、自分のいのちを永らえさせることすらできない、すなわち、神に絶対的に依存せざるを得ない人間の側に、神のなさることに不平不満を言う権利が毛頭ないことが、9章でパウロが力説していることです。

パウロが9章から11章にかけて、神の約束の民イスラエルの位置づけを明確にしておく必要を感じたのは、主権者なる神が、ユダヤ人をその反逆の歴史にもかかわらず、依然として約束の民として扱っておられることを知らせ、悔い改めて神に立ち返るよう促すためでした。神の初子としての選びの民、神の栄光が臨在される民、神との契約関係にある唯一の民、神の律法が与えられた唯一の民、礼拝の規定が詳細に指示された民、メシヤによる永遠の支配はじめ多くの約束が与えられた民としてのユダヤ人の位置づけは、アブラハムに約束された当時と何ら変わっていないのです。パウロの意図に大きく反して、後世、イスラエルは神から見放され、靈的イスラエルである教会にとって代えられ、教会がかつてイスラエルに約束されたすべての祝福に与ることになったという間違っただけの神学論が持ち込まれ、今日もまだその信奉者は多いのですが、神が絶対的な主権者であることを正しく理解していたなら、このような間違いは起こらなかったでしょう。もしキリスト教神学が主張するように、イスラエルが失格者として捨てられてしまったとしたら、ヘブル語（旧約）聖書の大部分を占めるイスラエルに対する神

の約束に疑問が投げかけられることになり、神の言葉、聖書自体の信憑性が揺るがされることになるのです。しかし、聖書が証しする神は「わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望むことを成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる」（イザヤ書 55：11）と断言され、一旦語られたことをご自身の名にかけて、また、名誉にかけて成就される主権者なのです。

9章6-13節を理解するには、パウロが引用した旧約のマラキ書の冒頭の段落を参照する必要があります。

『「わたしはあなたがたを愛している。」と主はおおせられる。あなたがたは言う。「どのように、あなたが私たちを愛されたのですか。」と。「エサウはヤコブの兄ではなかったか、... わたしはヤコブを愛した。わたしはエサウを憎み、... 彼に継いだ地を荒野のジャッカルのものとした。」たといエドムが「私たちは打ち砕かれた。だが、廃墟を建て直そう。」と言っても、万軍の主はこう仰せられる。「彼らは建てるが、わたしは打ちこわす。彼らは、悪の国と言われ、主のとこしえにのろう民と呼ばれる。」あなたがたの目はこれを見て言おう。「主はイスラエルの地境を越えて偉大な方だ。」と』（マラキ書 1：2-5）は、神が全イスラエルに語られたメッセージでした。

七十年のバビロン捕囚を経てエルサレムに帰還した五万人足らずのイスラエルの残りの者たちによって、困難を乗り越えてようやくエルサレム第二神殿が再建された後、祭司制度は継続され、神殿奉仕は続けられていたのですが、マラキの時代、民の間に三つの大きな問題が起こっていました。神の愛に対し無感覚、無神経になっていたこと、神の御旨、ご命令から離れていたにもかかわらずそのことに気づいていなかったこと、また、神に対する畏敬の念が失われていたことでした。先代の預言者イザヤやエレミヤやエゼキエルが語った復興のイスラエルの栄光に輝くビジョンとは程遠い現状に、神への信頼、信仰を失い始めた民は、霊的墮落から実生活における墮落へと、すなわち、掟で禁じられていた異邦人との国際結婚（掟はすべての国際結婚を禁じたのではなかった）や離婚はじめ、異邦人と全く変わらない不道徳に陥っていったのでした。

そのような神不信の時代に神が指摘されたのは、イスラエルが罪に陥っているその根源にあるのは、神の愛を知らず、自らの罪に気づいていないことであるということでした。この神の宣告で注目すべきことは、神がなぜエサウ（エドム）を憎んだかではなく、なぜヤコブ（イスラエル）を愛したかということでした。「憎む」という表現は比較で解釈すべきものではなく、本来なら神の祝福と特権に与ることのできた長子のエサウではなく、ヤコブを神が選ばれたという事実そのものが語られたのでした。神のなされたことに対し、分け隔て、ひいきという人間の側からの狭小、偏屈な捉え方をするのではなく、神が天地万物の主権者であられるという揺るがせない事実を受け入れることが要求されたのでした。

イスラエルが、主権者である神が自分たちを選んでくださったのだと、本当に認識するとき、すなわち、神の一方的な愛を知り、その愛に答えていなかった自らの罪の姿に気づくとき、イスラエルを通して、全人類が神との正しい関係に戻される、究極的な救いの時代が訪れるのです。イスラエルが、神があらかじめ定められたご計画の中で、不従順な状態に置かれていた間に、神は教会の時代をもたらしてくださり、過去二千年間、異邦人にキリストを通しての救いがどんどん広がっていますが、おそらく神の「証人」イスラエルを通して救われることになる諸国民の数は、二千年かけて教会が伝道してきたよりはるかに勝ることになるでしょう。「多くの国々の民、強い国々がエルサレムで万軍の主を尋ね求め、主の恵みを請うために来よう。... その日には、外国語を話すあらゆる民のうちの十人が、ひとりのユダヤ人のすそを堅くつかみ、『私たちもあなたがたといっしょに行きたい。神があなたがたとともにおられる、と聞いたからだ。』と言う」（ゼカリヤ書 8：22-23）や『終わりの日に、主の家の山は、山々の頂に堅く立ち、丘々よりもそびえ立ち、国々の民はそこに流れて来る。多くの異邦の民が来て言う。「さあ、主の山、ヤコブの神の家の上ろう。主はご自分の道を、私たちに教えてくださる。私たちはその小道を歩もう。」それは、シオンからみおしえが出、エルサレムから主のことばが出るからだ』（ミカ書 4：1-2）が実現するときは確かに近くなっているのです。

パウロは、『「わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ。」と書いてあるとおりです』を引用し、このマラキへのメッセージで神が主張されたように、主権者ご自身が決定された選びが人間の側の言動によって左右されるものではないことを、ローマ人への手紙の中でさらに発展させて、現状はどうあれ、イスラエルの永遠の選び、究極的な救いの確信に結びつけています。神がアブラハムに対してもイサクに対しても、子どもが生まれる前に預言を通して神の選び、「約束の子ども」をはっきりと示されたのは、神の主権が神ご自身の計画を遂行するというをこの世に告げ知らせるためでした。「神の選びの計画」は、人間の側の思惑、策略、工作とは全く無縁に神の預言通りに成就することによって、神がすべてを司っておられる主権者であることが明らかになるのです。神の思いや道は私たちの思いをはるかに越えて高く、私たちの理解を越えているという神の言葉が思い起こされるのですが、創造者と被造物という決定的な格差を認めずして、この真理を理解することはできないのです。

続く9章のメッセージで、パウロは、ユダヤ人だけでなく、全人類が神を知ること、神を正しく認識することを神は望んでおられ、そのご計画のゆえに、イスラエルを選び、教会を選んだのであること、すべてが神の愛に根ざすものであることを語っています。本来なら滅びしかない人間に、主権者なる神は二者択一の道を示され、その道の行く末をすべて明らかにされた上で、道を選ぶことを許されたのでした。ですから、死に値する罪を犯した者が救われる道をキリストを通して開いてくださった神の憐れみをおも拒み、反逆の道を選ぶ者は、神の愛を拒絶する者で、罪ある者に最初から定められた滅びに至る以外にないのです。